

# 文学部通信

Newsletter, Faculty of Letters, Kumamoto University

## 目次

学んだこと・一緒に過ごしたことを誇りに思える場に	1
2019年度の教務委員会について	2
2019年度の学生支援委員会の活動について	2
2019年度オープンキャンパス報告	2
3期生を迎え活気溢れる文学部 GLC	2
文学部～この1年～	3～6
総合人間学科/歴史学科	
文学科/コミュニケーション情報学科	
留学体験記	7
インターンシップに参加して	7
2019年度新任教員の紹介	7
漱石・八雲教育研究センター活動報告	8
永青文庫研究センター活動報告	8
2019年度熊本大学文学会活動報告	8

## 学んだこと・一緒に過ごしたことを誇りに思える場に

文学部長 水元 豊文

熊本大学では、毎年、社会で長年、活躍・貢献された卒業生を表彰しています。今年度も、文学部及び法学部の同窓会「武夫原会」からは4名の方が受賞されました。表彰式に参加し、改めて思ったのは、大学時代、苦楽を共にした同級生たちの横の繋がりだけでなく、先輩後輩の縦や斜めのリアルな繋がりを今以上に活性化し、熊大文学部を学んだことを誇りに思える場にもっともっとしたいということです。関係の皆様のご支援と協力がなければ、そのような場にはできないので、在学時から、それぞれ、密な繋がりを創ってもらいたいです。

### 大学院も視野に入れた教育環境の充実

本年4月に、コミュニケーション情報学科内に、学科の強みであった発信人材の育成に加え、「発信に値する情報コンテンツ」の発掘・生産・流通を学問的に研究し、地域固有の特色ある音声・映像言語資源や、マンガやアニメ、音楽、芸能等の同時代文化資源を含む、発信価値の高い現代文化資源を自ら収集・分析・整理し、国際社会に発信できる人材の育成を行う新コース「現代文化資源学コース」を設置しました。日本では他に同じ学部や学科はありません。ぜひ優秀な編集・プロデュース系人材を育成していきたいです。

本学部では「学びを広げ、深めてもらう」ために、大学院社会文化科学教育部との連動性もこれまで以上に強化しています。同教育部ではこれまで教育学部のみで教えていた約20名の教員の方たちにも、徐々に授業や学生指導を行っていただき、教育内容を拡充させていきます。加えて、現在、進めているのが、他大学や他の研究機関との連携です。その一つが、千葉大学等と連携し、令和2年度から開始する「アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム」です。優秀な研究者人材を共同で育成するプログラム内容は文部科学省からも高く評価され、文系分野では唯一、「卓越大学院プログラム」として採択されました。学部と大学院、他大学等との連携をさらに強化し、「学びたくなる」教育環境を整えていきたいです。

教育環境の充実には優秀な人材の確保なしにはできません。本年度、お迎えしたケリー・ハンセン教授には、英語教育に加え、日本文学研究者として、文学部附属漱石・八雲教育研究センターの中核を担い、その研究成果を世界発信していただきたいです。

### 先端的な研究成果を生かした教育の充実

人文社会科学の研究分野の更なる強化と成果の国際的な発信を行うため、令和2年4月に文学部教員が所属する大学院人文社会科学研究部に附属国際人文社会科学研究センターを開設します。当面5年間は、2つの領域に重点を置き、国際的な研究成果を出していければと思っています。領域の一つは「新資料学・歴史理論」で、革新的な資料分析法を用いた実証的研究を行い、歴史理論の再構築により既存の通説的理解を打破することを目指しています。もう一つが「学際的研究資源アーカイブ」領域で、水俣病やハンセン病関連事件に加え、免田事件など熊本を舞台とする事件に関連する研究資源アーカイブを構築し、「他者の痛み」に関する批判理論を学際的に展開することを目指しています。

このような研究の組織化ができるのも優秀な研究者が揃っているからだと思っています。本年度も国内外で高く評価される、「特色ある」研究成果が多数生まれています。例えば、小畑弘己教授は、これまで狩猟・採集社会と考えられてきた縄文時代にダイズやアズキの食物栽培があったこと、定住的生活様式のもとに貯蔵食料を加害する害虫がいたことなどを土器圧痕法を用いて実証的に検証し、これまでの縄文時代観を一新する歴史観を構築したと評価される業績を出されました。また、坂元昌樹教授は『(文学史)の哲学』で、1930年代から40年代にかけて影響力のあった日本浪漫派の文学運動に関して、中心人物の保田與重郎による古典文学評論の分析とその思想的背景の解明を試み、新たな観点からその総合的な理解の可能性を提示されました。さらに、安村明准教授はその国際的な共同研究で、発展著しい脳研究分野、特に神経科学者が考慮すべき倫理的問題をリスト化し、健全な研究発展のための指針を提示し、世界的に注目を集めています。これからも、そのような国際的にも先端的な研究成果を教育に還元し、更なる教育内容の充実に取り組んでいければと思っています。



最後になりますが、今後も、われわれ熊本大学文学部は、より良い教育の提供と特色ある評価の高い研究成果を出し続け、存在感のある学部を目指していきますので、ご支援とご協力をよろしく願いいたします。

## 2019年度の教務委員会について



文学部教務委員会は、正副委員長のほか各学科選出の4名の委員が教務担当職員と連携して、教務全般の管理運営を行っています。

たとえば、学生は履修登録、コース選択、卒業論文提出、単位取得、身分異動など、様々な手続きを学務情報システムや教務担当事務を通して行いますが、本委員会ではこれらの手続きのために提出された各種書類について審議します。留学や休学をはじめとして、学生の大学内外での生活状況は多様化しており、個別に検討を要する案件が生じる場合もあります。本委員会では、

文学部教務委員会 委員長 西楨 偉

学生の個別状況への配慮と規則の順守との適正な両立を実現するために、それらの案件について時間をかけて議論をしています。

また、学科選出委員は学科の学生・教員に対応する一方、正副委員長は全学の教務関係の会議に出席し、全学に関する議論に参加します。近年、予算の削減により、教職科目などを教育学部と共同で開講する必要が生じ、それに関する折衝も行っております。

このように、文学部教務委員会は、全学の動きに対応しつつ、文学部の教育が円滑に実施されるよう、一年を通じて教務全般の管理運営を担当しています。これからも、学生にとって大学生活が爽り多いものとなるよう努めていきたいと考えています。

## 2019年度の学生支援委員会の活動について



文学部学生支援委員会は、学生生活全般と就職活動の支援を目的とし、各学科から選出された委員4名と委員長により構成されています。委員長の私は、全学の「学生委員会」と「進路支援委員会」の委員でもあります。

進路支援委員会の役割のひとつに、学生の皆さんの就職や進路の決定状況を早めに把握し、進路未定の学生に対して、大学のキャリア支援課とともに応援することがあります。これを文学部の学生支援委員会委員と協力して行いました。

文学部の学生の就職状況は、ここ数年、好調といってよい状況にあります。また、就職先についてはヴァラエティに富んでおり、様々な分野に有為の人材を毎年送り出していることは、学生支援委員会としてもうれしい限りです。さらに、地方自治体を中心に、公務員

文学部学生支援委員会 委員長 牧野 厚史

を多数送り出していることも文学部の特色です。

ただ、就職は人生のひとつの節目に過ぎないことも事実です。そのため、これからの人生において自分の特性を生かし、充実した幸福な生活を送るためのヒントを得てもらうために、キャリア科目が提供されています。大学全体の教養科目としても提供がありますが、文学部固有の取り組みとして、2年生後期の授業「キャリア支援A」や、3年生前期の授業「キャリア支援B」を開講しています。学生が自分の進路を人生という長いスパンで見つめる機会と、実践的な就活対策を考える機会の両方を提供しています。

学生時代は、生活や学習の中でトライアンドエラーを試み、それを通じて様々な知恵を身につけていく時期です。大人としての自主性を尊重しながら、充実した人生への助走を支援するのが当委員会の役割だと考えています。

## 2019年度オープンキャンパス報告

8月3日(土) 午後に本年度のオープンキャンパスを文法棟で行いました。盛夏にもかかわらず、文学部への参加者は高校生と保護者等を含め1,300名余りに及び、活気にあふれました。

内容は昨年度とほぼ同様で、学科ごとの模擬授業、研究室訪問、保護者説明会、そして今年度新設された新コース(コミュニケーション情報学科現代文化資源学コース)の説明会を行いました。模擬授業は各学科2名、合計8名の教員による分かりやすい講義がなされ、どの教室も大入りでした。研究室訪問は各研究室の学生と教員が高校生と直接ふれあう貴重な機会と、研究内容の説明や部屋の装飾などに学生たちが率先して趣向を凝らしていました。いくつもの研究室をはしごする高校生もいれば、1つの研究室でじっくり話を聞く高校生もいて、どの研究室も活況でした。保護者説明会では卒業後の

広報・情報化推進委員会 委員長 鹿嶋 洋

進路や資格取得、入試改革への対応など様々な質問が出され、学部長はじめ入試・教務・学生支援の各委員長が回答しました。新設の現代文化資源学コースの説明会では関係教員が質問に対応しました。

オープンキャンパスは文学部の教育内容を対外的に発信し、受験生を獲得するための重要な機会です。より魅力的な内容となるよう、引き続き改善に努めて参ります。



▲木下尚子教授による模擬授業の様子  
(撮影：大野龍浩教授)

## 3期生を迎え活気溢れる文学部グローバルリーダーコース(GLC)

3期生10名を迎え入れた文学部グローバルリーダーコース(GLC)は、活力でいっぱいです。

3年生になった1期生は、卒業後の進路をより強く意識して様々な取組みに積極的に動いています。就職を見据えインターンシップに参加する一方で、卒業研究も始まり、テーマ設定や先行研究を踏まえながら独自の研究のあり方を模索する中で、壁にぶつかりながらも、深く学び、論理的に考え、自らの論考を表現するという厳しくも楽しい知的冒険の旅の真ただ中です。また、3名は、本学の交換留学制度を活用し、ドイツやオーストラリアでの1年間の留学へと旅立っています。

2期生は、GLC生のための特別海外短期留学プログラムを活用し、ラトビアやマレーシアでの研修に参加するなど活発に活動しています。海外「旅行」ではありませんので、事前調査・学習で準備を整え、現地の学生と協働し調査を行い、英語でディスカッションや

文学部 GLC 学生担当メンター教員 教授 斎藤 靖

プレゼンテーションを行うなど、かなり鍛え上げられるプログラムです。現地の学生とは、帰国後も様々な形で交流が続いているようです。

3期生も先輩たちを追い越す勢いで活動しています。学部の垣根を越え全GLC生が参加する毎週定例の英語によるセミナーでは、ネット会議を活用したニューヨーク市立大学の学生との交流が始まり、「持続可能な社会」をテーマに議論を重ねています。

2020年4月に4期生10名を迎える準備も順調に進んでいます。文学部GLC生の活躍にご期待ください。



▲マレーシアでのプレゼン！ もちろん英語です！

## 総合人間学科

### ■哲学 瀧本 汐梨さん (3年)



私は「万学の祖」とも呼称される哲学を学んでいます。一般的にイメージされる哲学史を学ぶことが哲学の主というわけではなく、論理的思考を培い、自分自身の中にある疑問に対し、真摯に向き合い、考え続けることが重要であり、講義や演習のみならず、日常のあらゆる場が勉強の場となり得ます。

哲学研究室では、演習や卒業論文に向けての課題研究はもちろんのこと、学年、学部を超えて議論できる「哲学カフェ」という課外活動も行われています。議論し合い、お互いの意見を知ることは相手の考えを知り、相手のことを理解することでもあります。このことは、今後の人生においても、大切なことだと思います。

哲学とは、「議論を通して、己を育てる」ことなのではないでしょうか。残りの一年で、自分の研究分野に関わる知識を深め、先生や様々な方との意見交換や議論を重ねることで、自分を成長させ、より人間性をも高めていけたらと思っています。

### ■芸術学 松下 萌さん (3年)

芸術学研究室では音楽や美術の理論をもとに、自分が興味を持った芸術について幅広く研究しています。個性豊かで親身になって指導して下さる先生方と共に、音楽・美術・ファッションなどのそれぞれが関心のある芸術領域について、和気あいあいと意見を交わしています。芸術経験や知識がない人でも楽し活動することができ、笑いが絶えないのも芸術学研究室の魅力です。



私はゲームと現代社会について興味を持っています。演習の授業では風景の哲学について学習し、実習の授業では作品制作としてレトロゲーム風のドット絵アニメーションの作成を行っています。また研究室では、現在も進化し続けているバーチャルリアリティについて、実際にPlayStationVRでの体験も行いました。

来年度は経験したことを活かし、ゲームと現代社会にはどのような関係や影響があるのか、また今後発展するであろうゲーム界の展望などをさらに深く研究していきたいと思っています。

### ■心理学 上村 友紀さん (3年)



私たち心理学研究室では、寺本先生と安村先生のご指導のもと、のびのびと心理学を学んでいます。一言に心理学といってもその学問的領域は幅広く、臨床心理や教育心理、経営心理など世の中には心理と呼ばれるものは混在しています。

その中で、私たちが日々学んでいるものは「認知心理学」という領域です。認知心理学では、「人間」の行動や認知について実験で得られたデータを基に分析を行い、「心理」という目に見えないものを数値化するという、基礎的な分野に取り組んでいます。

現在、私たちは授業の中で、実際に自分たちで実験の計画を立て、実験ソフトのプログラミング、測定を行い、そこから得たデータを分析するという、実践的な講義を受けています。

座学で体系的な知識を学ぶことも楽しい(かも)ですが、自らで考え実行し得られる「生きた知見」には、学問の真理(心理学だけに…!?)があると思います。

### ■倫理学 中島 慧子さん (3年)

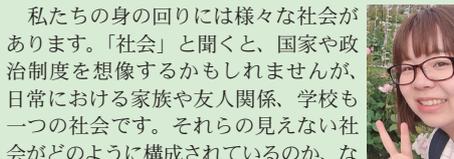


倫理学とは、私たちが普段当たり前に行っている様々な道徳的価値判断(「善い/悪い」、「すべき/すべきではない」など)について、その根拠を哲学的な観点から考察していく学問です。倫理学履修モデルでは、規範倫理学・応用倫理学・メタ倫理学に加えて深層心理学と、非常に幅広い分野の内容を学ぶことができます。授業の形式としては、講義のほかにも文献読解やプレゼンテーション、そしてその内容についてのディスカッションがあり、自らの頭で倫理的問題について考え、自分なりの答えを導きだせるような練習を積むことができます。

私が所属している研究室では、主に規範倫理学と応用倫理学を取り扱っています。そこでは、道徳判断と感情、エンハンスメント、障害者の自己決定といった内容について、それぞれの担当者が文献に関する発表を行い、全員でディスカッションをします。

私が興味を持っているテーマは、ビジネス倫理、特に内部告発の妥当性です。ゼミでの発表では、先生や同じゼミの方々から質問を受けることによって、今まで自分だけでは考えつかなかった新しい視点を得ることができています。本格的なテーマの絞り込みはこれからですが、先生と相談を重ねたり、ゼミで議論を進めていったりするなかで、より自分の関心に一致しているものを見つけていければと思います。

### ■社会学 川路 佳乃さん (3年)



私たちの身の回りには様々な社会があります。「社会」と聞くと、国家や政治制度を想像するかもしれませんが、日常における家族や友人関係、学校も一つの社会です。それらの見えない社会がどのように構成されているのか、なぜ成り立っているのか、という疑問を追究するのが社会学という学問です。社会の成り立ちを解明するには、文献を読んで知見を得るだけでなく、対象の地域に行って調査をすることもあります。

実際に今年度の社会調査実習では、熊本県荒尾市と福岡県大牟田市で「三池炭鉱の生活史と旧産炭地の地域再生」というテーマで調査を行いました。私は大牟田市の商店街で店舗経営を行っている人にインタビュー調査を行い、商店街の今後について現在分析を行っています。

調査実習の他にも、私の所属するゼミでは荒尾市の万田坑や荒尾干潟でのイベントを開催しました。私は現在3年生なので、来年の自分の研究に向けて調査実習やゼミで学んだことを生かしていけるようにしたいです。

### ■文化人類学 柴田 祐花さん (4年)



文化人類学とは、「人間とは何か」ということについて、文化的な側面から研究する学問です。文化人類学では、世界中の様々な民族の文化について研究・比較することで人間の多様性と共通性を究明し、そこから人間とはどのようなものなのかを考えます。

私の所属しているゼミでは、演習の時間に課題図書を読み、自分で要約・発表を行います。発表して、先生とゼミのメンバーと議論を行うことで、筆者の意見を読み取り、自分の言葉にして説明する能力を養い、文化人類学を学ぶ上での基礎的な力を身につけます。また、応用演習の時間には、演習で培った読解力を活かして自分の興味のある分野について研究を行います。

現在ゼミ生は、日本人の遺体に関するこだわりや、情緒と文化、スポーツとアイデンティティなど、幅広い領域にわたって研究を行っています。対象領域の制限が無い点が文化人類学の難しいところではありますが、最大の魅力でもあると思います。

### ■地域社会学 前島 彩音さん (3年)

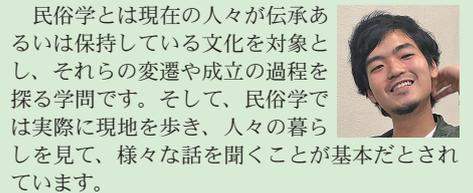


地域社会学は、地域の抱える実際の課題について学ぶ学問です。文献での研鑽に加え、住民に直接話を伺う調査やアンケート調査などをを用いた実習も行われます。

今年は、佐賀でノリ養殖に携わっている女性たちにご協力頂いて、聞き取り調査を実施しました。そこでは、私たち学生が2人1組になり対象者とコミュニケーションをとりながら、質問に対してどう答えたか記録していききました。実際に聞いたことを基に調査の集計・分析も自分たちで行います。その過程で、先生からの助言を受けつつ研究室の仲間たちで意見を出し合っって課題や疑問点と向き合うため、理解を深めながら研究に取り組むことができます。

地域社会学研究室には、親身に対応して下さる心優しい先生方と学部の先輩・後輩、大学院生、留学生など多様な仲間がいます。学年問わず関わり合える機会があるため、知識や情報の共有ができ、たくさんの刺激を受けながら日々楽しく過ごしています。

### ■民俗学 原田 信敬さん (4年)



民俗学とは現在の人々が伝承あるいは保持している文化を対象とし、それらの変遷や成立の過程を探る学問です。そして、民俗学では実際に現地を歩き、人々の暮らしを見て、様々な話を聞くことが基本だとされています。

民俗学を学ぶ学生たちも実際にフィールドに飛び込みながら民俗学を体感していくこととなります。2年次の社会調査実習では調査計画立案から報告書の作成までを学生たちが主体となって行います。今年は阿蘇市一の宮町坂梨で調査実習が行われました。

3、4年生は卒業論文執筆に向けて各々が自分の関心に合わせてテーマを設定し、実際にフィールドワークを行いながら研究を進め、週二回のゼミでの発表を行いながら自分の研究をブラッシュアップしていきました。今年も研究テーマは幅広く、カレーや心霊スポット、中学生に膾炙する俗信、熊本大学周辺的神社など様々です。

自分自身の一年間を振り返ると、調査や研究を行いながらゼミで先生や研究室のメンバーと議論することで、多くのことを学ぶことができたと考えています。

### ■地理学 山口 絵里さん (3年)



地理学研究室では、土地や場所、地域などに関する「なぜ」を問い、地域を良くするにはどうすればよいか、といった課題に取り組んでいます。テーマは様々で、それぞれの興味関心に沿った研究をしています。3年生は、卒業論文の構想を練っているところなのですが、都市郊外や中山間地域の交通、文化や伝統工芸、廃校活用、サードプレイス等、それぞれ様々なテーマや調査対象地域を決め、そのテーマに関する文献を収集して理解を深めているところです。先生方が一人一人に丁寧に指導して下さり、研究室のメンバー同士でも相談をしながら取り組んでいます。

この一年で、地図の作成方法を習得し、地理学についてさらに深く考えることができました。2年生で大分県豊後高田市にて行った、地理調査実習でのアンケート調査等の経験も役立っています。研究室は、中国からの留学生も多く、個性豊かなメンバーで賑やかです。研究テーマや関心も多種多様なので面白いです。

## 歴史学科

### ■日本史学

4月、9名の2年生と3名の新入大学院生を研究室に迎え、総勢39名で、研究室の新年度が始まりました。4年生は、7月の構想発表会、11月の中間発表会を経て、この原稿を書いている今まさに、卒業論文作成の大詰めを迎えています。3年生が中心となる、9月の「古文書実習」は、文化財保存の仕事に関わる卒業生も集まってくる本研究室の名物授業ですが、今年は伊佐町糸田の緒方家文書を整理する4年目でした。今回は、本の貸し借りや古い、旅行記など近世村落における文化的側面を物語る史料群の「脈脈」に突き当たったらしく、これまで全国的にもそれほど多くの蓄積がある訳ではない民衆生活の豊かな側面に終始驚かされ通しでした。なお本実習の成果は、年度末には報告書として刊行し、熊本県内の公的機関に寄贈しますとして、この記事を読まれている皆さんも、是非手に取ってみてください。

その一方で、9月末に計画していた合宿は、台風17号の影響で中止せざるを得ませんでした。ただ、その代わりに一日だけ、研究室メンバー全員が集まり、2・3年生の共同研究報告や4年生の卒論発表を聞いて議論し、その夜は打ち上げで盛り上がりました。このうち3年生の報告は、11月末の九州大学との合同ゼミで発表されました。2年生も、研究室の雰囲気慣れるとともに、いくつかの演習・実習を経験して、発表スキルや古文書読解能力を伸ばしている最中です。



▲古文書実習における調査風景

### ■考古学

2019年度は2年生7名、大学院修士2名、博士1名を迎え、総勢27名となりました。夏の実習発掘調査は5年ぶりに熊本で行いました。阿蘇市平原古墳群です。平原古墳群での調査も5年ぶりで、教員の杉井は合宿先の山田地区公民館も懐かしいものですが、学生たちは古墳の発掘が初めてのため相当の緊張を感じていたようです。3・6号墳の発掘調査と8号墳の測量調査、この3現場を同時に進めましたが、8月下旬が降雨続きであったこともあり、なかなか思うようには進みませんでした。調査終盤、3号墳でほぼ完成の土師器壺が出土して学生たちを喜ばせましたが、結局3号墳では墳丘面の確定には至らず、今後の重要な課題として残されました。調査中、阿蘇市主催の中通古墳群地元向け啓発イベントにも参加、古墳解説のポスターを展示したり、長目塚古墳出土遺物展示作業を手伝ったりして、文化財保護・活用を実地に学びました。今回の24日間という調査期間は昨年度までの対馬に比べると10日程長いもので、学生たちは少々疲労気味でしたが、こうした厳しい調査を乗り切ることで大きく成長してくれることを願っています。なお、2020年3月に木下尚子先生が退任されます。これまで3名体制で教育・研究活動を行ってきましたが、次年度以降は補充なく2名体制となります。現在、予算規模も小さく、発掘調査報告書の印刷費も捻出できない事態となっています。熊大考

古も大きな転換期を迎えています。



▲平原6号墳トレンチの実測風景(2019年9月5日)

### ■アジア史学

4月に4名の新たな2年生を迎え、2019年度のアジア史研究室は3年生3名、4年生4名、大学院生2名の計13名でのスタートとなりました。8月のオープンキャンパスでは新2年生が中心的な役割を果たし、高校生に受験勉強や大学生活についての説明をしてきていたのが印象的です。

ここ数年、継続的に行われてる熊本大学と安徽大学との学術交流ですが、今年度も7月に4年生4人がサマープログラムに参加いたしました。海外は初めてという学生もいましたが、無事に充実した交流がなされたようです。書物からだけでは分からない中国の現実の一端に触れる機会になったのではないのでしょうか。海外に行くことは自分の常識を相対化することにつながりますので、こうした交流を今後も続けていければと考えております。

9月には恒例となっている研究室の夏合宿も行われました。今年度は3年生が企画の中心となり、場所を温泉や山鹿灯籠まつりで有名な山鹿市に設定。菊池川のほとりにある施設の一室で、精読してきた研究書の内容をみんなで討論いたしました。一人で読書をするのとは違う視点をそれぞれが獲得できたのではないのでしょうか。帰りのバスまでの時間に旧豊前街道の史跡にまで足をのびし、往時の人々の生活に思いを馳せました。

年号も新たなものに改まり、新しいアジア史学研究室の歴史を刻んで行けるよう、研究室一同努めて参る所存です。



▲山鹿市での夏合宿の様子

### ■西洋史学

本年度は、個性豊かな2年生9名と大学院生1名を新たに迎え(総勢31名)、昨年度と同様活気ある1年となりました。今年度もまた、多くの学生たちが熊本大学の境界を越えて活躍した1年でした。9月にはトルコから庄崎太郎君が留学を終えて無事帰国、今春には美淋光哉君が海外青年協力隊としてウズベキスタンへ旅立ち、2年間国際協力に従事します(ガンバレ!)。今春には三浦聖斗君も、文学部の国際奨学事業に採択され、スペインへ調査旅行に向かいます。また他大学の学生が集う九州西洋史学会若手部会においては(11月、福岡大学開催)、4年生の三田村翔梧君と大学院生の中島駿介君が、それぞれ素晴らしいプレゼンを行い(三田村君はフロリダの黒人奴隷たちの自由

を求める闘いについて、中島君は中世シチリア王国におけるイスラーム教徒の受容について報告)、熊大クオリティーをいかに発揮しました。2・3年生がグループワークを行う授業(合同ゼミ)において、今年度はディベートやプレゼン・バトルを行いました。学生たちが切磋琢磨しながら培った情報発信力の成果が、この若手部会でも実感することができました。また集中講義として、大阪大学から中谷惣先生をお迎えし、現代社会との比較を念頭に、中世イタリア社会について学ぶことが出来ました。中谷先生は熊大西洋史の卒業生でもあり、毎晩遅くまで交わされたにぎやかな議論を通じて、熊大西洋史への先生の熱い思いや期待も伝えられ、学生たちにとって非常に充実した3日間となりました。最後になりますが、学生たちの日々の努力の結晶でもある、3年生の課題研究、4年生の卒業論文、大学院生の修士論文の内容は、今春刊行される『西洋史研究室年報 第21号』に綴られる予定です。



▲恒例の天草での夏合宿の1コマ

### ■文化史学

2019年度は、新たに7名の2年生が研究室の仲間に加わりました。3年生12名、4年生5名、大学院生1名をあわせて日本人の学生が25人。ベトナムとオーストリアから来た2名の交換留学生に韓国研究生1名、指導教授の新井先生と鈴木先生を加えると総勢30人です。

4月に新2年生の歓迎コンパ、7月に留学を終えてベトナムに帰国する留学生の送別会を兼ねた前期お疲れさまで会を開催。夏期休業中の8月には天草で夏合宿、9月には課題研究のテーマ報告会を行いました。10月には新たに加わったオーストリアの留学生と韓国の研究生の歓迎会を開催。12月は忘年会と4年生の卒業論文激励会、2月は追い出しコンパと、恒例行事は例年通り盛り上がりました。

学生が自主的に決定する課題研究の今年のテーマは「アジア」。宮崎滔天や宮本常一のアジア観、20世紀初頭におけるイギリスの 아일랜드 統治と日本の朝鮮統治の比較、大正時代の中国観光など、それぞれの個別テーマで研究し、レポートにまとめました。

新井先生の演習テーマはカルチュラル・スタディーズ、鈴木先生の演習では新聞錦絵を読みました。8月の集中講義では金城学院大学の桐原健真先生をお招きし「言説史」という研究視角を学んでいます。このほか、交換留学生として2名が韓国とドイツの大学に赴いたのに加え、文学部国際奨学事業の支援を受けて1名がアイルランド調査旅行を行い、学生たちの国際的な活動が目立った1年でした。



▲2019年夏合宿(天草)

## 文学科

### ■日本語日本文学 中尾 純志さん(3年)

日本語日本文学研究室は、日本語学と日本文学について深く学べる研究室です。研究領域は大きく日本語学・古典文学・近代文学に分けられており、その中から自分の興味関心に合わせて勉強・研究することができます。

研究室の特徴は、所属学生が多く、同級生や先輩方と交流する機会が多いことです。6月には、研修旅行で「くまもと文学・歴史館」などを巡り、夕方から行われた新入生歓迎コンパで先輩方や先生方とじっくりお話しすることができました。日頃の学生研究室だけでなくこのような交流の場でも、研究や就職活動の世界といった、なかなか聞けない有意義なお話やアドバイスを聞くことができます。

学年を越えた交流の中で、学問以外でも、それまでの自分にはなかった知識や考え方を得られるという点が、この研究室の大きな魅力の一つです。



▲ある日の日文学生研究室

### ■中国語中国文学 永野 希歩さん(2年)

中国語中国文学研究室では三人の先生方の下、中国の古典・近現代文学と現代中国の政治や社会情勢などをあわせて学んでいます。高校までは漢文の授業やニュース等でしか触れることのなかった中国について、更に広い視野を持てるような講義を受けることができます。

研究室の特徴としては、留学生が沢山在籍していて、普段の授業や生活の中で生きた中国語に触れられる点が挙げられます。また先生方も含め、研究室全体で仲が良く和気藹々としており、定期的に本場の火鍋を囲んで親睦を深めています。私自身、先生方や留学生の皆さんとの会話で新しい刺激を受け続ける日々です。

さらに中国語圏への留学や学会訪問の機会もあり、普段の学びを発展させることも可能です。異文化交流に興味のある人には最適の環境で、充実した学生生活を送ることができます。



▲意見が飛び交う卒業論文中間発表会

### ■英語英米文学 芳井 璃子さん(3年)

私たちは先生方のご指導のもと英米文学書を読み、それを通して英語だけでなく当時の文化や歴史、思想を学んでいます。英文学、米文学、英語学などそれぞれの分野を専門とする先生方がいらっちゃって、自分の興味、関心がある分野を深く学ぶことができます。他国について知ることによって日本を客観的に見ることができ、視野を広げられていると実感しています。また、4年次には英語による卒業論文に向けて取り組む

ことで、さらなる英語力の向上を図っています。



▲2019年度 英文研究室一同

### ■独語独文学 矢田 峻平さん(2年)

本年度は2年生3名が新たに独語独文学研究室に加わりました。4月の新入生歓迎コンパには始まり、12月の合宿では卒業論文の中間発表もありました。

9月のドイツ短期留学プログラムには独文研究室から2年生2名が参加し、滞在先のフライブルク市では、フライブルク大学のドイツ語学研究室の訪問等の活動を行いました。

講義では、「ドイツ語のことわざ入門」「ドイツ短編映画研究」「ドイツ文学史にみる死」など、文学や言語に加え、ドイツ語圏の社会や文化も学びました。また、ドイツの学生と互いに母国語を教え合うタンデム活動を通して、ドイツ語を学ぶモチベーションを上げることもできました。

本年度末には荻野蔵平教授がご退官されます。とても寂しくなっていますが、荻野先生から学んだことをこれからも活かしていきたいと思っています。



▲独文新入生歓迎コンパにて

### ■仏語仏文学 笹谷 紗希さん(3年)

仏語仏文学研究室は4年生・3年生に春から新たに2年生4名を迎え、計15名になりました。先生方の熱心なご指導の下、仏文学や仏語学だけでなくフランスの文化や時事などを幅広く学んでいます。サガズ先生の授業には、6月にポルドーから帰国された先輩方が参加され、より有意義な授業になっています。8月には1回目の卒業論文中間発表会があり、先輩方から大変刺激をうけました。また12月にはフランス人の先生を招いた、畑先生主催の講演会が開催されるので、そこでの交流がとても楽しみです。

この研究室には毎年のように留学する学生がおり、今年の9月同じ研究室の友人が1年間の留学に旅立ちました。私も夏休みに3週間バリの語学学校に通いましたが、大変素晴らしい経験ができました。機会があれば、フランスにもう一度行こうと考えています。



▲卒業論文中間発表にて

### ■比較文学 桑原 詩月さん(3年)

私たち比較文学研究室に所属する学生は、日々自身の興味・関心に合った研究を行っています。このコースの何よりの特徴は、研究対象が文学にとどまらず、映画や演劇・ミュージカル、コミック等ジャンルによる縛りが存在しないことです。研究題材の裏側に隠された作者の考えや、政治的・宗教的・文化的背景、メディアとしての特性などに幅広く触れながら、広い視野で研究を行うことができます。自分の知的好奇心を満たすにはうってつけの環境です。

また講義中に、学生たちや研究室の教員の前で自身の研究の発表を行ったり、質疑応答や意見交換、アドバイスの時間も設けられていたり、多くの仲間たちと切磋琢磨し合える場も存在します。今年も、通常の講義とは別に、学外からいらした先生による集中講義があり、普段の講義にはない雰囲気の中で刺激を大に受けることができました。ちなみに、今年の集中講義のテーマは「物語られる「世界」と戦後日本の表象文化」(坂口周先生)でした。

講義外でも、新入生歓迎コンパや毎週火曜の昼休みに開催される昼食会などで、学生たちの交流が行われており、楽しい雰囲気の中で皆研究に励んでいます。



▲2、3年生と留学生たち(比較文学概論II講義のあとで)

### ■言語学 マリアムさん(2年)

言語学という「色々な言語を学びながら言語学者になるための演習をすること」だと最初は思っていました。実際に受けてみたら日本語の特殊な方言アクセントの演習や中国の少数民族であるウイグル語の所有者によって所有物の名詞が変わる構造も学びました。言語の研究のためのアプリやソフトウェアを習って実践することもできます。例えば、音声学に必要な音声分析ソフト「praat」やテキストから日本語の文法分析の結果を簡単に見ることができる文法解析ツール「茶豆」も知りました。

言語学の勉強だけでなく他の日本人以外の人と話し合うこともできます。国際交流会のような雰囲気も感じられます。研究室のメンバーは少ないからこそ食事会を行ったり鍋パーティーをしたり楽しいです。

この経験を通して私の母語であるマレー語の研究に役に立つと私は期待しています。



▲パンジャブレストランでハラール食

## コミュニケーション情報学科

### －新たなスタートを切って－

今年度、コミュニケーション情報学科は新たなスタートを切りました。2004年4月にコースとして発足して以来、1学科1コースという教育・研究体制を取ってきましたが、4月から現代文化資源学という新コース<sup>1</sup>を開設し2コース制になりました。そして新コースには、水元豊文先生（メディア・コミュニケーション論）、齋藤靖先生（18～19世紀の英語で書かれた小説研究・現代文学文化批評理論）に加え、文学部から児玉望先生（言語学）、また総合人間学から山田積先生（ドイツ語・芸術学）と鈴木寛之先生（民俗学）をお迎えしました。

また、英語で実施される教養科目や汎用スキルを養うための課外教育プログラムなど、一般の学部生とは異なる学習をおこなってきたグローバルリーダーコース（GLC<sup>2</sup>）の学生が3年生になり、うち9名が本学科の専門課程に進級しました。このように、学科の構造と学生の特性が多様化することになりました。教育の目的や育成する人材像が大きく変わることはありませんが、「新たなスタート」を学科全体のプラスにしていきたいと思えます。

### ■就職状況は好調だが、今後は要対策

今年度卒業予定の39名の就職内定率、および進路決定率は76.9%（19年11月末）です。文部科学省と厚生労働省による10月1日付けの調査での大学（学部）内定率76.8%より若干、上回っています。内定先の業界・業種としては、金融（銀行・証券・保険）や流通、サービス業が多いのは他学科と同様ですが、情報通信関連や製造業（電器・機械・材料）が若干多く、公務員・教員が少ないのが、本学科特有の傾向です。ただし、過去6年間は、成長産業である情報通信や、復興需要や大型物件の開発で関心が高まっている不動産の増加が見られます。一方、労働環境についてマイナス・イメージのあるマスコミや流通業は大きく減少するなど、変化が見られます<sup>3</sup>。

今後危惧されるのは、地元志向の強い女子学生の受け皿になってきた金融業のさらなる後退です。ITによる業務の自動化、及びサービスのネットシフト等を背景に昨年度くらいから採用人数を大幅に減らしています。現在は高い就職内定率を維持していますが、すでに影響が出ています。社会で通用するスキルに加え、意識の面でも強く成長できる教育プログラムの

提供に努めていきたいと考えています。

### ■基礎スキル獲得と実践による人材育成

本学科の教育は、言語運用力、情報・メディア運用力などの基礎スキルを用いて多様な専門知識を使いこなし、実社会の課題解決にあたることを特徴としています。TOEICやIELTSなどの外部検定による実践的な英語運用能力強化に加え、海外での多様な実体験を通じたコミュニケーション能力の定着を重視しています。大学や学部間の協定に基づく交換留学制度を利用し、今年度は米、英、豪、西で7名が10ヶ月以上の海外経験を積んでおり、加えて2名が「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」<sup>4</sup>対象者に選抜され、豪、比、カンボジア、デンマークに留学します。また、夏期休暇を利用して9名がアジアや欧米に短期留学をしました。

### 海外留学で学んだこと

荒生 早織さん(2年)

私はGLC夏季短期留学プログラムで、マレーシアプトラ大学へ2週間留学しました。多民族国家であるマレーシアで、異文化を持つ人々がどのように共生しているのかに興味を持ち、マレーシアを選びました。日本とマレーシアの学生の混合のグループで、研究テーマを留学前にセミナーを通じて決め、現地では研究テーマのプレゼンテーションに向けて、ディスカッションとフィールドワークを繰り返しました。異なる文化を持つメンバーが集まったグループでコミュニケーションを取り合って課題を解決することは難しいことであり、お互いの考えが理解し難いこともありました。ただ、その価値観を理解しようとしたことで、今までにない視点を得ることができました。留学中の経験は、私にとってかけがえのないものになりました。



▲グループメンバーと修了式でのスナップ

### ■「現代文化資源学コースの紹介、これまでの取り組みとその手ごたえ」

2019年4月に新設された現代文化資源学コースでは「新たな文化価値の創造」をキーワードに、伝統文化からマンガ・アニメ・音楽などのポップカルチャーまで現代の多様な文化を対象として収集・記録保存の方法や活用の仕方を考え、日本文化のあたらしい魅力をグローバル発信できる人材の育成を目指しています。初年度である今年は文化資源の基本的な考え方について学ぶ「現代文化資源学入門」が開講され、この授業を受講した1年生が2年進級時のコース選択を経て当コースの1期生となります。次年度からは、熊本で「まんがラボ」を展開する（株）熊本コアミックスとの連携授業も開講されます。授業以外では、第二次大戦における激戦地であるブーゲンビル島戦に関するフォーラム「記憶を記録に～次世代に共有すべき生きた遺産～」<sup>5</sup>や、日本マンガ学会の全国大会なども開催されました。

### ■「日本マンガ学会第19回大会」開催

「ONE PIECE」キャラクターの銅像設置などで熊本のマンガ熱が高まる中、6月22～23日の両日、マンガ研究者の全国組織である日本マンガ学会の全国大会が熊本で初めて開催され、のべ400名ほどが参加しました。「時代を超える『時代劇』」をテーマとしたシンポジウムには川崎のぼる・みなもと太郎・岡田屋倫一・大柿ロクロウの4名のマンガ家と研究者が登場。最新のマンガ研究の動向を伝える研究発表も5会場で25件行われました。

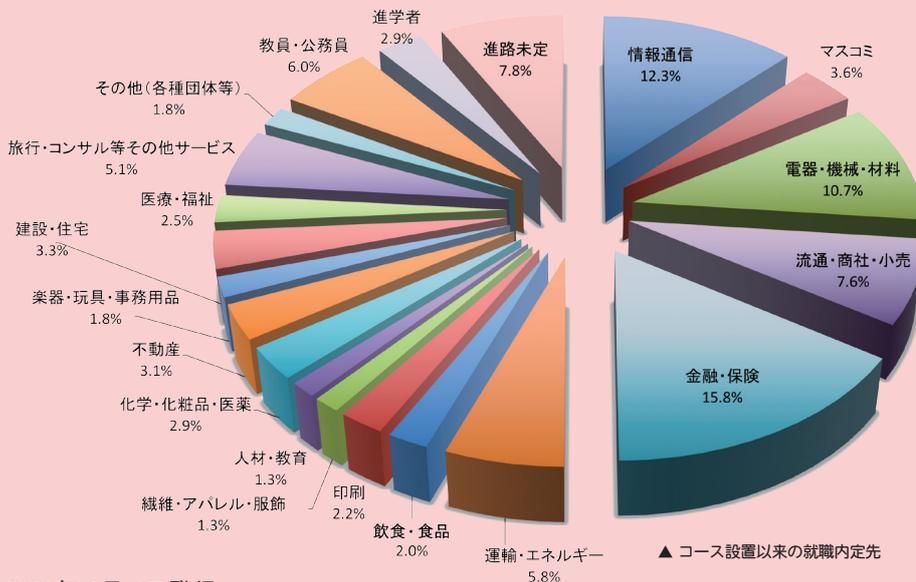
### 「日本マンガ学会に参加して」

原田 知佳さん(1年)

私は、学生ボランティアとして日本マンガ学会に参加し、研究者や漫画家、教授の方々の話を聞く貴重な経験をしました。研究では、独自の視点や解釈から漫画の台詞、キャラクター、構図等が分析されていました。これまで漫画をただ読むだけでしたが、今回初めて漫画を研究対象として見る視点に触れ、非常に新鮮でした。いまや海外からも注目される日本の漫画やアニメは、私たち日本人にとって身近でありながら、その歴史や本質がもつ潜在的な価値に私たちはまだ気づけていないかもしれません。その価値を見だし、後世に残していく研究の重要性や楽しさを実感させてくれる有意義な学会でした。



▲時代劇についての対談の様子



1. 現代文化資源学コースでは、アニメ、ポップミュージック、演劇、方言など「今ある有形・無形の文化」を学びます。
2. GLCは、グローバル社会を生き抜く人材の育成を目指して、文学部・法学部・理学部・工学部の4学部横断型で設置されています。
3. 進路把握の難しい留学生および3月期以外の卒業生を除いた就職者398名(本学大学院修了3名を含む)が対象。
4. 事前の研修やインターンが充実しているほか、企業の人材がメンターにつくなど、官民連携型でグローバル人材を育成するプロジェクトとして位置づけられています。
5. 同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター・熊本県ブーゲンビル島会との共催。

## 留学体験記

### ■コミュニケーション情報学科 下山 いより さん(4年)

#### 英国留学での「出会い」

2017年7月から約1年間、イギリスのリーズ大学に留学し、私は3つの「出会い」を経験しました。

1つは、学ぶ楽しさとの「出会い」です。日本の大学では座学が当たり前ですが、現地では毎回の講義がディスカッション形式。とにかく会話に参加しようと、拙い英語でも負けじと現地の学生に混じって討論やプレゼンを行いました。また学外でも、現地での専攻であったサステナビリティに関連する環境保護のボランティアやパネルディスカッションに参加したりと、自分の行動次第でフィールドや人脈が広がられる面白さが実感できました。

2つ目は、今まで交わることのなかった人や文化との「出会い」です。寮やサークル、旅行先などで出会う多国籍で多様なバックグラウンドをもつ人々と、文化や言語の壁に悩みながらも、言葉を尽くして歩み寄ることで得た繋がりは、私にとって一生の財産となりました。

そして自分自身との「出会い」も大きな収穫の1つです。初めての海外生活、友人づくりや文化の受容など様々な葛藤の中で「自分が逃げてきた壁」に何度も当たり、克服をすることができた自立と内省の1年間でした。

これらの「出会い」の中で、楽しさはもちろん、挫折も多くあった留学生活ですが、今となってはどの「出会い」も今とこれからの自分を支える大切な一部です。卒業を目前に控えた今、大学生活を悔いなく終わられるのは、この留学を経験させてもらったおかげだと確信しています。



▲人生初のアイスランド一人旅中に仲良くなった友人とのスナップ

### ■文学科 吉田 卓史 さん(4年)

#### フランスで世界の留学生と交流

私は2018年の9月から約1年間、フランスのボルドー・モンテーニュ大学に留学し、主に附属の語学学校でフランス語を学びました。語学学校では、テストの成績によってクラス分けがあり、自分のフランス語能力にあった授業を受けることができました。授業では、フランス語の文法や会話はもちろんですが、外国人にボルドーの歴史的建造物を紹介するためのビデオ作りなど実践的なフランス語を学ぶことができました。私が授業で驚いたことは、他の留学生達の「積極性」です。授業中、先生が生徒達に質問をすると、皆すぐに挙手し答えていました。また、授業で分からないことや興味を持ったことについては授業後に先生に質問していました。彼らの授業や語学学習に対する積極的な姿勢に刺激を受け、私も文法の問題などは自分から発言するように努めました。

留学の最大の収穫は、フランスだけではなく、中国、ベトナム、ガーナ、メキシコ、シリアなど世界のいろいろな国の留学生や現地の学生と交流できたことです。お互いの文化や習慣だけでなく、日本ではあまり話さないような話題についても意見を交換しました。その時に感じたことは、日本について説明する力が不足していること、そして「私がどれだけ話し相手の国のことを知らないか」ということでした。話が進んでいく中で、相手の国についての知識がないと十分に相互理解ができなと分かりました。また、帰国後、彼らの国についてデータなどを調べると彼らの話が事実とは少し違う部分もあることにも気づきました。

このように、相手の国についての情報を持っていないと、本当のコミュニケーションが出来なかったり、相手の話を鵜呑みにしてしまったりすることになります。これから外国の方と出会い、話すことも増えるはずなので、この留学経験をもとに世界に興味を持ち、自主的に調べてコミュニケーションをはかっていければと思っています。



▲フランス人学生、世界各国の留学生とボルドーを観光する

## インターンシップに参加して

### ■コミュニケーション情報学科 橋口 広菜 さん(3年)

フジテレビの職業体験型教育プログラムに参加してきました。熊本地震を経験してから、報道という仕事に興味を持ち、情報番組制作について知りたいと参加を決めました。「めざましテレビ」制作の体験では、失敗してもすぐ切り替えられる「打たれ強さ」の大切さを学びました。テレビの生放送では、一つのミスがダイレクトに視聴者に伝わります。ミスに対する柔軟かつ臨機応変な対応が瞬時に求められ、同時にそれをカバーするため周りの協力も必要となることを実感しました。番組作りを通じ、チームワークやコミュニケーション力に加え、働く上で必要となる根幹部分を学ぶことができましたように思います。

フジテレビ社員の方の講義では、「自分の足を使って経験を積み重ねて行くということがより良い作品作りに繋がる」、「何より熱意と元気が必要だ」という言葉を頂きました。思っていたよりも、地道に泥くさい仕事だという感じを受けましたが、さらに報道に携わりたいという気

持ちは強くなりました。日々変化し、毎日違う仕事ができるのが魅力的だと、「めざましテレビ」のチーフディレクターの方が楽しそうに話す姿が強く印象に残っています。「報道に関わる仕事がしたい」という夢が、今回のインターンシップで、明確な目標に変わりました。このような機会を用意して下さったフジテレビの方にお礼申し上げます。また、大学には助成金を支援していただき、大変感謝しております。ありがとうございました。



▲インターン資料を元に自己分析

## 2019年度 新任教員の紹介

### ■ ケリー・ハンセン 教授 文学科



はじめまして。2019年4月に文学科の英語英米文学研究室に着任したケリー・ハンセンと申します。出身はアメリカ西海岸のシアトル市です。オレゴン州のウィラメット大学で英文学の学士課程を修了いたしました。卒業後、英会話の教師として一年間の契約で来日しました。当時は日本の言語、文化、歴史など、ほとんど何も分かりませんでした。しかし、日本に住んだことで日本の文化(特に日本の文学)に興味を深まり、大学院に入って、日本の文学について詳しく学ぼうと決心しました。2009年にハワイ大学大学院で、東ア

ジア言語文学を専攻し、博士課程を修了いたしました。

研究は近現代文学における日本文学です。主に明治時代の言文一致運動(話し言葉に近い口語体を用いて、文章を書くこと)を対象とした研究を行っております。熊本大学に就職する前は、カナダのプリティッシュコロンビア大学、カリフォルニア州のサンディエゴ州立大学、岡山大学に勤めていました。前任校では色々な活動に参加しましたが、夏目漱石、小泉八雲のような明治時代の一流作家と強い繋がりのある熊本大学で皆様と一緒に勉強ができることは大きな喜びです。それに、九州の親切な人々と豊かな自然の中で暮らせることを大変嬉しく思います。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

## 漱石・八雲教育研究センター活動報告

漱石・八雲教育研究センター兼務教員 坂元 昌樹

漱石・八雲教育研究センターは、2017年12月に設置された新しい文学部附属センターです。熊本大学の前身である第五高等学校ゆかりの夏目漱石と小泉八雲について、本学教員がセンター兼務教員として共同研究を行うとともに、それらの研究成果の定期的な発信を通して、地域の文化振興に貢献して人材育成に寄与することを目的としています。

本センター兼務教員による夏目漱石の共同研究の成果として、2019年3月に西横偉・坂元昌樹編『夏目漱石の見た中国 『満韓とところどころ』を読む』(集広舎)が刊行されました。近代の東アジアと漱石との関係の再評価を目指す共同研究の成果の第一弾であり、同共同研究の成果は今後も継続的に発表予定です。同書の内容と関連して、本センターの第2回公開フォーラムを2019年3月29日(金)に本学くすの木会館で開催しました。テーマ「漱石・ハーン研究の新展開」の下で、第1部は本センター兼務教員による報告とパネルディスカッション(西横偉教授・平野順也准教授・坂元昌樹)、第2部は福澤清本学名誉教授による特別講演を実施しました。当日の全体司会を本センター兼務教員の永尾悟准教授、特別講演のコメンテーターを同じく松岡浩史准教授が務め、活気ある公開フォーラムとなりました。また、2019年10月5日(土)には本学法文棟A3教室で熊本大学文学部国語国文学会との共催による漱石と八雲に関する公開講演会とパネルディスカッションを開催し、当日も本センター兼務教員が参加して活発な討議が行われました。

なお、本センターでは、2019年3月からセンターの公式ウェブサイトを公開中です。本センターの活動にご関心をお持ちいただけましたら、ご覧いただければ幸いです。



▲西横偉・坂元昌樹編『夏目漱石の見た中国 『満韓とところどころ』を読む』(2019年3月 集広舎)

## 永青文庫研究センター活動報告

永青文庫研究センター専任准教授 今村 直樹

学内共同教育研究施設となり3年目を迎えた永青文庫研究センターであるが、2019年度も以下のような活動を実施することができた。

まず、永青文庫資料に基づく研究活動では、稲葉継陽センター長が編集担当した『永青文庫叢書 細川家文書 島原・天草一揆編』が2020年3月に、稲葉センター長・今村直樹専任教員・後藤典子研究員が主たる執筆を担当した永青文庫資料に関する一般書が2020年4月に、それぞれ吉川弘文館から刊行される。前者は、2018年度から刊行を開始した第2期永青文庫叢書(全5冊刊行予定)の第2巻目となる。研究紀要『永青文庫研究』の第3号も、2020年3月に刊行予定である。基礎研究では、2019年度から採択された科学研究費補助金(基盤研究(B))をもとに、熊本藩の代表的な惣庄屋文書である古閑家文書の総目録作成事業に着手した。2018年度から始まった松井家文書の総目録作成事業も着実に進展している。

社会貢献活動でも、多くの講演会・展覧会を開催した。熊本大学所蔵「松井家文書」調査 市民セミナー「加藤清正と名古屋城天守石垣」(2019年7月20日)では、稲葉センター長と後藤研究員が、名古屋城天守閣石垣に関する新出史料の歴史的意義を解説した。特別協力を行った熊本県立美術館の「熊本城と武の世界」展(2019年10月26日～12月15日)、今村専任教員が監修した、附属図書館の第35回貴重資料展「熊本藩に生まれた近代一手永・惣庄屋制と地域行政」(2019年11月2日～11月4日)も盛況であった。



▲講演する稲葉センター長と後藤研究員(於「松井家文書」調査 市民セミナー)

## 2019年度 熊本大学文学会活動報告

2019年度文学会常任理事 三瓶 弘喜

文学会は、文学部の教育と研究を様々な形で支える、学生と教員による互助組織です。今年度は主に、以下の事業を行いました。

- 1. 文学部の教育・研究環境整備のための支援金**  
新たに設立された漱石・八雲教育研究センターならびに現代文化資源学コースに対して、書架等の整備のために50万円の支援
- 2. 講演会・学会等への支援**  
熊本を主会場とする以下の7件について、2万円～10万円の支援  
①日本社会分析学会例会 ②日韓新石器時代研究会 ③日本マンガ学会  
④宋代史研究会 ⑤九州心理学会 ⑥講演会「フランス文学における戦争」  
⑦シンポジウム「華文俳句の可能性」
- 3. 就職活動に対する支援**  
①「公務員試験対策講座」「教員採用試験対策講座」を受講した学生会員に対する補助(各講座に対して1人3,000円)  
②福岡で行われる合同会社説明会への参加支援(貸し切りバスによる送迎。3月に実施予定)
- 4. 研修旅行補助**  
授業の一環として行われる調査・実習旅行や、各研究室で課外活動として行われる合宿・研修旅行に対する補助(参加学生会員に1人2,000円)
- 5. 進級記念品**  
4年に進級した学生会員に対する記念品(1人4,000円の図書券)
- 6. 新入生歓迎行事・卒業式関連行事に対する支援**  
学科やコース・研究室で行われる新入生歓迎行事・卒業式行事に対して、総額で24万円の支援
- 7. 図書整備費**  
学生用図書を充実させるため、今年度は文学科とコミュニケーション情報学科に対して、それぞれ15万円の補助

- 8. 留学のための語学試験補助**  
留学する際に必要な語学試験に対する補助(1人5,000円まで)
- 9. 学生の学術交流に対する支援**  
学生が中心となって企画・運営する他大学との学術交流への支援  
今年度は、考古学研究室、西洋史研究室、日本史研究室に対して2～4万円の支援
- 10. 学生用コピー機の維持管理**
- 11. 『文学部通信』に対する補助**  
『文学部通信』の発行費用、ならびに保護者の方々への郵送料を負担



これらの事業は、会員(学生と教員)の会費によってまかなわれ、文学部の教育・研究活動に広く還元されるものです。未加入の学生と教員の方におかれましては、文学会の活動の趣旨をご理解いただき、ぜひご加入をお願いいたします。今後は、みなさまのご理解とご協力をいただけるよう努力して参りますので、文学会をどうぞ宜しくお願いいたします。

文学部通信 第19号  
2020年3月1日



発行: 熊本大学文学部/熊本大学文学会  
編集: 熊本大学文学部 広報・情報化推進委員会  
鹿嶋 洋、佐藤岳詩、三澤 純、朴 美子、片山圭巴  
ウェブサイト [www.let.kumamoto-u.ac.jp](http://www.let.kumamoto-u.ac.jp)